

第136回 日文研フォーラム



長者の山

— 近世的経営の日欧比較 —

Millionaire's Mountain

— A Comparative View on Early Modern Business Organization
in Japan and Europe —



バルト・ガーンズ

Bart Gaens

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 山折 哲雄

● テーマ ●

長者の山

—近世的経営の日欧比較—

Millionaire's Mountain

—A Comparative View on Early Modern Business Organization
in Japan and Europe—

● 発表者 ●

バルト・ガーンズ
Bart Gaens

国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員
Lecturer, Int'l Research Center for Japanese Studies



2001年2月6日(火)

発表者紹介

バルト・ガーンズ

Bart Gaens

国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員

Lecturer, International Research Center for Japanese Studies

略歴

平成11年 3月 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程修了

平成11年 3月 総合研究大学院大学 博士 (学術)

平成11年 5月 国際日本文化研究センター 中核的研究機関研究員就任

主な著書・論文

「近世・近代における住友家の家訓と家法」『日本語・日本文化研究』（大阪外国語大学）第4号 平成6年

“The Relation between Family and Enterprise in Early Modern Japan - The House of Sumitomo as a Case Study -” *Orientalia Lovaniensia Periodica* 29, 1998.

“The Organization of Merchant Houses in Tokugawa Japan - a Comparison with the Low Countries-”(博士論文) The Graduate University for Advanced Studies, 1999.

“Family, Enterprise, and Corporation - The Organization of Izumiya-Sumitomo in the Tokugawa Period.” *Japan Review*, Vol. 12, 2000.

一 「長者の山」

私の出身はベルギーですが、ベルギーという国は平地で、南部には丘のようなものがあります。山がありません。そのため日本にやってきた頃から、京都の山が大好きになりました。よくハイキングに行つて山に登ることがあります。しかし、今まで一度も登つたことがなく、そしてこの先も、登ることのできない山があります。それが「長者の山」であり、今日の話の題名にもなっています。なぜそれを題名として選んだかという、理由は二つあります。まず、山は長者、つまり金持ちになる苦勞という、万国共通の課題をよく表しているからです。「長者教」（一六二七年）という、日本の近世において町人の教訓を記した本のなかで、金持ちになる苦勞は比叡山の二十倍の高さである山に登り、大河を渡ることに譬えられています。

「さるほどに、長者の山とてあり。たとへば、ひゑの山を、二十、かさねあげたるほどにて、なりはふくべのごとし。ふもとに大河あり。うちがわを、百ばかりあはせて、せのはやき事、たきのおつるのごとし。これをわたりて、かの山をあがる人すくなし。それ、かねをもち、かねをまうくるは、つねのせいなり。」

そして、もう一つの理由は、今日は、日本の商人の典型としてもともと京都にそのル

ーツをもっている住友家について話すことを選んだからです。戦前には財閥として、現代では系列として有名な住友は、泉屋という商家として始まり、後に大阪の代表的な豪商にまで発展しました。江戸時代初期の創業から、当時「赤金」と呼ばれていた銅の精錬と銅山業を家業としましたが、銅山がまさに住友家の「長者の山」となったわけです。

では、今日は、近世ヨーロッパと日本の商人はどのようにこの山に登ろうとしたかを比較するという観点から見たいと思います。商売をやるにはどうしても利益追求が大切で、その目的達成のために他の人と協力する必要があります。つまり、継続的・計画的に事業を営み、合理的な経営組織を作る必要があると言えます。どのように商売をするのか、どのような経営組織が使われているか、そしてどのような問題が現れるか、を検討するなかで、その国の文化も見えてくるのではないのでしょうか。つまり、今日の発表では近世ヨーロッパと日本の商人の比較を試みたいと思いますが、ヨーロッパのケーススタディとして、現在ベルギーの一部であるフランダース地区に焦点を当ててみたいと思います。御存じのように、ベルギーは一八三〇年に独立した、比較的新しい国です。近世初期には現在のベルギー、オランダとルクセンブルグの地域がネーデルラントとして統治されていた領域でした。南部のフランダースは近世初期、つまり一六世紀

には繁栄していましたが、一七世紀は独立を宣言したオランダの黄金時代となりました。日本でフランダースと言えば「フランダースの犬」を連想する方が多いようですが、フランダースが中世から近世初期にかけてヨーロッパで一番繁栄していた地域だったことはあまり知られていません。当時ブルージュ（ブリュッヘ）とアントワープ（アントウエルペン）というような商業都市では各国の商人達が集まって、経済的に、そして経営組織の面でも、大変進んでいた地域でした。とくにアントウエルペンは国際的商業都市となつて、ヨーロッパの商業の中心地にまで発展しました。印刷業、生糸、ダイヤモンドのみがき、じゅうたんの制作、いわゆる贅沢品の産業・商業がその経済的繁栄の基盤でした。そして経営の面では、会社の初期的形態も発達し、商法も制定されました。この「アントウエルペン慣習法集成」という商法が、一七世紀の始めにオランダの東インド会社の設立に大きな影響を与えたことも事実です。東インド会社は世界初の株式会社と呼ばれていることは周知のとおりです。しかし、一六世紀の終わり頃からフランダースが政治的・経済的に不安定な状態におちいり、大勢の商人および多くの資本がアムステルダムを始め、ヨーロッパ各地へと移動してしまいます。このため、フランダースの商人は、密接な血縁的関係のネットワークを作つて、国際的な商業活動を続けることができました。したがつて、フランダースを比較研究の対象として選んだ理由は、私自身

がその地域の出身だから、というだけではなく、経営組織が早い時期から非常に進んでいたことに加え、ヨーロッパ各地で活躍していたフランダース出身の商人達が西欧の代表的な経営組織を作っていたからです。

二 フランダースの場合

では、フランダースの商人はどのように「長者」になろうとしていたのでしょうか。近世初期のフランダースの代表的な商人、Della Faille（デラ・ファイエ）家の場合を例に考えてみようと思います。Della Faille家は織物の商業を中心に富をなし、現在でもベルギーの貴族の一つとして知られています。かれらのサクセス・ストーリーは一六世紀のJan Della Faille（ヤン・デラ・ファイエ）から始まりました。Della Faille家のその後の発展を四つの段階にわけ、お話ししたいと思います。

a. 弟子入り

多くの商人の間では、富裕な知人や、商人をしている身柄のもとで、若い時から弟子として働き始めることが通例となっていました。Jan Della Failleも例外ではありませんでした。Janは一五一五年にアントウェルペンで生まれ、イタリアのヴェニスに渡った

時は一五歳でした。ヴェニスに本部をもつ同じフランダース出身のMarten de Hane (マールテン・デ・ハーネ) の企業に弟子として入るわけですが、そこで会計と文書の写しに加え、主人のビジネス旅行に同伴したりして、商人としての訓練を受けました。結局一五三九年にアントワープ支店にDe Hane企業の支配人として送られますが、そこで感謝しなければならぬ主人に対し、恩を返すどころか、会社で不正を働き始めます。アントワープとヴェニスは離れていたため、本部の目が届くことなく、比較的簡単に会社の信用を使って、ひそかに個人取引、個人商いを行うことができたのです。会計を偽造し、自分の財産を増やした結果、主人の直接の競争相手になって、最終的には親会社が倒産してしまうという結末に至りました。ここには近世における商人の非常に特徴的な問題点を見い出すことができます。それは信用の問題です。近世のいわゆる個人中心主義の現れとも関連していると思いますが、「詐欺」や「騙し」の要素が非常に強く出ています。企業は信用のおける人間を、代理人や代表者として選ぶ必要があることは言うまでもありません。その忠義を高め、信用を確保するためにさまざま方法が使われました。代理人を親戚から選んだり、代理人を自分の親戚と結婚させたり、そして、会社に出資させるなどの方法がとられました。しかしどの方法をとっても、保障はなく、支配人が雇い主を「裏切った」ケースが非常に多かったようです。Jan Della

Falle はヴェニスの de Hane の企業に出資し、主人の娘と結婚しましたが、その戦略は失敗に終わりました。ドイツ語の Tauschen (交換する) と Tauschen (騙す) という二つの単語の語源が同じであることも、単なる偶然ではないのです。

一六・一七世紀頃から経済が国際的に拡大・分散し始めたので、遠隔地に支配人などを派遣するのではなく、当地に住んでいるエージェント、つまり委託代理人を採用するシステムが徐々に増えます。彼等は雇用経営者ではなく、取引きの一定率の手数料を取る臨時代理人 (commissionairs) で、必要に応じて採用されました。たとえば、A は B に依頼されて、外国で商品を買ったり売ったりしたとしましょう。そこで、A も自分の会社を所有しているのです。A は自分の商品を売るために、B あるいは B の会社を仲間として使う、というわけです。

b. 個人企業

とにかく、Jan Della Falle はこのように雇用主の信用を裏切って、自分の財産を集めることに成功しました。それを資本に、個人企業として織物、香辛料などをスペイン、ポルトガル、イギリスを相手に輸出入をする遠隔地商業を行いました。

しかし、個人企業としての活動だけではなく、一六世紀の商法に明文化された「加入」

が商人にとって大きなビジネス・チャンスを提供しました。「加入」(participatie)というシステムが確立したため、個人の商人も有限責任で他の企業に出資することができるようになりました。資本家が他の企業に投資し、経営に参加せずに利益配分を受け取るわけですが、責任は出資金額を限度とすることを可能にしたやり方です。つまり、有限責任で、匿名の出資が企業に一般に行われ始めたことが、株式会社への発展に大変重要な要素だったといわれています。Jan Della Failleは個人企業としての取引きと、他の企業への有限責任的投資によって、一六世紀終わり頃までにヨーロッパの他の豪商の中で、最も富裕な企業の一つになりました。

c. 共同企業 (コパニー、compagnie, gesellschaft van handel)

Jan Della Faille は一五八二年に亡くなりました。事業は共同企業として続けられました。相続は会社財産が分散してしまうという危険性をもっていました。西欧における相続は単独相続、平等分配などさまざまな形でありましたが、それは会社の存続にも大きな影響を及ぼしたことは言うまでもありません。当時フランダースでは平等分配が一般的でした。しかし、例えば、複数の息子がいた場合、その中で企業人としての資質をもつ子供に対し、他の子供よりも多くの財産を受け渡すという傾向が当時の遺言に多く見

られます。このようなケースでは、不平等な相続を受けた息子達が裁判を起こしたりしました。相続をめぐる家族の紛争が企業に大きな影響を与えたということです。Della Falle 家にも遺産相続をめぐる争いが起こりました。兄弟のあいだで争いが続き、父親から受け継いだ企業を共同体として続けることが不可能になったので、長男Martenは一人で、自分の配当をもって、義理の兄と元支配人二人と、一〇年間の会社契約に入ったのです。

これでコンパニーが成立するわけですが、コンパニーというのはヨーロッパの近世を通じて商業組織の基本的な形態でした。現代用語でいえばパートナーシップあるいは合名会社のようなもので、一六世紀から大きく発展し、法律にも成文化されるようになりました。その特徴は次のようにまとめられることができます。コンパニーということばの語源はラテン語の、「パンを分かち合う」という意味をもっているように、その原点は家族企業だったことが分かります。だんだんこのようなヨコの連帯をもとにする会社形態が多くなります。コンパニーは会社契約に基づいて、決まった存続期間のあいだに、一つの商号と資本の下に共同企業を行うということを意味します。社員が会社の営業に対しての連帯責任を負い、会社契約の登録とともに設立し、法人格を受けます。さらに、契約期間は形式上短い契約期間ではあっても、その契約が六年または一〇年ごと

に更新されていることから、事実上長期持続するものが現われる、ということですから。規模は大体小さく、二人から八人までの社員がもつとも普通だったようです。彼等は会社に投資し、持ち分の投資率に基づいて、利益配分を受けるわけですが、いつでも分割を請求する権利をもっていました。この原理は「共有」と呼ばれています。さらに、社員は一つ以上の企業に出資することも一般にみられる傾向だった、ということですから。数少ない社員の役割分担が行われたと同時に、平等と合議制が強調されるシステムでした。コンパニーのリーダーはコーディネーター・調整者として働き、*primus inter pares*（つまり同輩者中の第一人者のような存在でした。各社員が会社のために第三者に対して代表権をもっていたのです。

d. 貴族の仲間入り

一五九二年会社契約が終わり、Maartenが商人生活をやめることにして、領地および別荘 (*huisen van plaisantie*) を購入した後、貴族入りへの第一歩として公務員（行政長官）になったのです。一六一四年というとても早い段階で貴族入りに成功するとともに、商業活動も終わったわけですから。当時の商人にとって、貴族の生活振りが理想と考えられていたので、貴族の仲間入り、つまり社会的可動性は商人の目的だったと言えます。

一般的に、商人の目的は、会社そのものではなく、家族にとつての繁栄であり、会社はつまり社会的昇進への手段と考えられました。領地、土地（莊園）を購入し、結婚相手を買族から選んで、政府へ申請することによって貴族の仲間入りすることができました。フランダースの北方に位置するオランダには、商人が都市ブルジョワジーになることは知られています。商人は政治的権限をもつていて、社会的ステータスも高かったようです。一方、フランダースでは、商人の地位が低く、政治的影響力もなかったわけですが、社会的昇進は比較的簡単にできたといえます。当時の貴族は閉鎖的階級ではなかったので、豊かな商人にとつて土地所有貴族へのコースは開いていました。貴族には、実業家、企業家が多かったのも、かれらが一九世紀からベルギーの産業化に大きく貢献したと密接に関わっていると考えられます。

商人の地位が低く、日本と同じくお金もうけは汚いと見られたことが挙げられます。そのため、富裕な商人はできるだけ社会的奉仕に努めようとしました。そこで祭りなどのようなイベントに資金を供給したり、あるいは福祉施設に寄付をします。一つ面白い現象として「神さん保険」を指摘することができます。それは、この商業取引がうまくいくと、一定の金額を教会、あるいは養育院のような福祉施設に寄付することによって、社会に対する個人の精神的安心感を保証する手段でした。

というわけで、相続のトラブル、社員間の紛争、あるいは社会的可動性のために、会社の存続が短かったことが傾向として挙げる事ができます。しかし、会社が長期存続できたか否かというよりは、継続そのものが会社にとって重要であったか、あるいはどのような意味をもっていたかを問わなければなりません。とくに固定資本への投資と、いわゆる「伝統」の意味をポイントとして取り上げることができると思います。製造業に関わっている会社、つまりものを作る会社はまた違った特徴をもっていました。製業の会社は固定資本に大きく出資した会社でした。さらに、品質のいいものを売るには伝統、あるいはブランド（商標）が重要な役割を果たしました。印刷業はその例の一つです。このような部門には日本の「家」に似たような考え方を探ることができます。アントウェルペンのPlantin-Moretus（プランタン・モレトウス）はその独特な例です。この会社は二つの方針を使って、三〇〇年以上存続しました。それはまず第一に、遺言には、会社財産の非分割が定められたこと。そして、第二に、会社に参加しない遺産相続人の買い占めという方法です。出版社・印刷屋・本屋の創業者であるChristophe Plantin（クリストフ・プランタン）には息子がいなかったため、二人の義理の息子を家業に取り入れました。この二人は元弟子で、娘と結婚させました。その一人、Jan Moerentorf（ヤン・ムーレントルフ）は一五八九年にアントウェルペン本社を相続す

ることになります。二代目の彼も企業を一体のまま、一番才能のある息子に相続させることを決定します。この規定は彼の意志に従って、その後永遠に遺言に含まれることになります。そのために会社財産が分割されず、会社は長く続けることができました。しかし、これは近世ヨーロッパでも例外的なケースだったといわざるをえません。

三 日本の場合…「家」における「総有」

a. ビジネス・システムとしての「家」制度

次に、日本の場合を見ていきたいと思います。江戸時代の日本で一般化された「家」概念、「家」意識はビジネスにとって非常に合理的枠組みだったことがよく知られています。一つの家業を中心に富を集めて、分家、別家を作るのは商人の「みち」と見られていました。西鶴は「町人の出世は、下々を取り合せ、その家をあまたに仕分くるこそ親方の道なれ」(『日本永代蔵』iv・1)と書いていますが、暖簾分けをするのは町人の社会的義務で、社会的ステータスをあげるための手段でもあったと言えます。このように、大規模な商家が現れますが、経営体としての「家」の概念は、血縁者と非血縁者、本家・分家・別家を統合しました。

ヨーロッパの会社の短い存続期間に対して、日本では、家業を含む「家」の永続は逆に当然とみられました。「土農工商」という言葉通り社会的昇進が限定されていたため、「家」の存続そのものが目的となっていました。徳川幕府は相続形態を町人の自由任由に任せており、商家において家督、つまり当主の地位及び家の財産、の単独相続は「家」全体の繁栄の重要な柱となっていました。非分割の財産の共同所有と共同経営が理想となっていたのです。三井家の場合は商人組織の理想型と見られています。三井高利は自分の個人財産、つまりすべての店と全資本を一体として子供たちにまとめて相続させることを決めました。「身上一致」、つまり共同で所有、経営するべきだと規定していたのです。そこで本家・分家の主人たちは「大元方」（一七一〇）という組織を作り、「家」による経営＝「総有」の原理をよく表していると思います。京都の下村家（デパートの大丸の創業者）の場合にも似たようなシステムが見られます。「三家一致」と呼ばれていて、下村の三家が全店の経営を調整する方法でした。

住友家は三井や下村と違って、大元方のような機関を作っていませんでしたが、一つの「家」として本家、分家、別家が共同で複数の事業を営んでいました。住友の家業を開始したのは蘇我理右衛門（一五七二～一六三六）でした。彼は若いときから銅吹き

(銅の精鍊と細工)を身につけて、一九歳から京都で店を構えました。また、「南蛮吹き」という銀銅吹き分けの新技術を、一人の西洋人から習得しました。銅の中に含んでいる金銀を抜き出す技術は当時まだ日本にはなかったため、銅は金銀を含んだまま海外に輸出されていました。この新技術は住友の事業の先駆となり、繁栄の始まりを意味したわけです。理右衛門は屋号を「泉屋」と称しました。住友二代の友以は一六二四年ごろに事業を京都から大阪に移し、住友の銅吹き所は徳川時代を通じて銅精鍊業の中心となったのです。すでに一六七八年(延宝六年)に住友家は輸出銅の三分の一を供給しました。三代友信が初めて吉左衛門を名乗り、江戸、長崎に出店を設けました。しかし、それより、事業に最も重要な意味を持ったのは別子銅山の開発(一六九一、元禄四年)であったといえるでしょう。泉屋は幕府に輸出銅(御用銅)を供給し、莫大な富を蓄積したのです。このような銅の鉱業、精鍊と輸出は事業の中心、つまり家業でしたが、徳川時代を通じて両替業、札差業、砂糖、薬種などの輸入などという多角経営は分家と別家によって行われました。

事業のトップにはもちろん当主がいましたが、住友では襲名・吉左衛門と名乗りました。しかし、経営と所有の分離と経営者への権威の大規模な代表権委譲は、ヨーロッパの場合と対照的でした。とくに別家と支配人は家業の重役となり、広い権限をもつてい

たようです。経営と所有の分離は日本の近世の商業の一番大きな特徴としてよく指摘されています。住友も支配人（番頭）が主人（当主、家長）の代わりに家業経営を担当することが見られ、それは例外ではありませんが、それではなぜそうなったのかを見る必要があると思います。それは

やはり、主人として商売にむいていない、あるいは関心をもっていない、あるいは贅沢を好み、富を散財してしまう可能性の持ち主であったことが原因と考えられます。住友家の場合、一八世紀の半ばから二〇年以上続いた「お家騒動」がその直接の原因となつたと考えられます。表1を御覧ください。それには住友の歴代の当主が一覧表となつて

表1 住友家の歴代

	当主	襲名	生・歿	家督期間
I	政友		1585 - 1652	
II	友以	理兵衛	1607 - 1662	1652 - 1662
III	友信	吉左衛門	1647 - 1706	1662 - 1685
IV	友芳	吉左衛門	1670 - 1719	1685 - 1719
V	友昌	吉左衛門	1705 - 1758	1720 - 1758
VI	友紀	吉左衛門	1741 - 1816	1759 - 1781
VII	友輔	万次郎	1764 - 1804	1781 - 1792
VIII	友端	吉次郎	1788 - 1807	1792 - 1807
IX	友聞	吉次郎	1787 - 1853	1807 - 1845
X	友視	吉次郎	1808 - 1857	1845 - 1857
XI	友訓	吉次郎	1841 - 1864	1857 - 1864
XII	友親	吉左衛門	1843 - 1890	1865 - 1888
XIII	友忠	吉左衛門	1872 - 1890	1888 - 1890
XIV	登久		1849 - 1899	1890 - 1893
XV	友純	吉左衛門	1864 - 1926	1893 - 1926

いますが、特に七代目から吉左衛門という襲名を使わなくなったことに気がきます。住友家の「お家騒動」を目に見える形で表しているといえるでしょう。

同時に、この「お家騒動」は当時のビジネス・システムとしての「家」と「総有」、つまり、「家」的支配、「家」的所有の限度をも明らかにするエピソードです。ビジネス・イデオロギーは家訓・家法によく現れています。住友家の家訓にも本家、分家、別家は協力して、イエ全体の繁栄のために全力を尽くすべきだ、という規定があります。しかし、従来の研究では多くの場合、理想と現実の区別がなされていません。私の見解では、家訓は現実を反映しているのではなく、あくまでもイエはどうあるべきかを描写しているに過ぎないと考えます。

b. 住友の「お家騒動」

住友家の「お家騒動」を見るにあたって、重要な資料は、「御仕置例類集」でした。この資料は、江戸幕府の最高裁判所であった評定所が一七七一年から集めた判決です。二十年以上にわたったこの騒動は非常に複雑で簡単には説明できませんが、要点だけに触れてみたいと思います。表2をご覧ください。住友の当主は吉左衛門と呼ばれていま

表2 18世紀後半における泉屋住友の「お家騒動」

- 1750、寛延 3 : 吉左衛門友昌、分家の理兵衛友俊に家政総括委任
1758、宝暦 8 : 友昌死去
1759、宝暦 9 : 友紀 (18歳) 相続、吉左衛門襲名、幼年のため理兵衛友俊後見人
1762、宝暦13 : 理兵衛友俊、立川銅山の所有権、吉左衛門へ譲渡
1770、明和 7 : 分家・親類側、友紀を退隠させようとするが、失敗
1773、安永 2 : 「泉屋吉左衛門・家名前退願」
1780、安永 9 : 訴訟裁許により吉左衛門友紀、形式上退隠
1781、天明 2 : 友輔万次郎相続、父友紀と不和
1782、天明 3 : 吉左衛門友紀、家督を譲らないため、本家方・親類方より出訴
(「泉屋吉左衛門・家督譲渡、差滞候」)
吉左衛門派「泉屋吉左衛門・手代、於江戸表、再応訴状差出候一件」
1785、天明 5 : 評定所判決。吉左衛門「押込」
1786、天明 6 : 理兵衛友俊隠居
1791、寛政 3 : 友輔万次郎「病氣退隠」
1792、寛政 4 : 4歳の友端吉次郎相続
1800、寛政12 : 吉左衛門友紀による家政改革
1807、文化 4 : 友端死去、友聞吉次郎相続 (養子)
1816、文化13 : 吉左衛門友紀死去

したが、泉屋は吉左衛門の個人所有でした。強力な豊後町分家が同等なステータスをもっていたと考えられます。五代当主の友昌は病気のため経営権をその分家の当主であつた理兵衛友俊に委任しました。この理兵衛友俊は九年の間、後見人として当主の役割を勤めていました。しかし、友昌がなくなつた後、息子の友紀が六代目の当主、吉左衛門となりましたが、経営はそのまま後見人の理兵衛と老分別家が担当していました。彼等は吉左衛門は贅沢が好きで、当主としてふさわしくないといつて、親戚、手代のサポートを得た上で、吉左衛門を隠居させようとしてきました。それは「泉屋吉左衛門・家名前退願一件」に当たります。最初に、町奉行はそれを認めず、訴訟側の敗訴に終わりました。しかし、吉左衛門は当主にふさわしくない行動を続け、そのうえ、隠居するのを断つたため、再び分家・親戚・手代に起訴されました。そして結局安永九年（一七八〇）に訴訟裁許により退隠しなければならなかつたのです。その後、息子の万次郎が相続し、本家の所有権を受けますが、理兵衛がまだ経営に関わつていたので、泉屋吉左衛門友紀は金銀、江戸の店、ほかの財産を握り、吉左衛門という襲名を譲ることも拒否していました。それから十数年にわたつて訴訟が続きます（「泉屋吉左衛門・家督譲渡、差滞候一件」）。家は二つの対立しているグループに分けられていました。つまり吉左衛門のサポート派と理兵衛・万次郎を支持するグループ。逆に、吉左衛門のグループは、理兵衛

友俊派は賄賂を使って町奉行に当主を隠居させた、と言って、逆訴訟をするわけです（「泉屋吉左衛門・手代、於江戸表、再応訴状差出候一件」）。結局、吉左衛門は天明五年（一七八五）の裁判判決で五〇日間の「押込」と家督を全部譲渡するよう命じられましたが、その後も、隠居の身分で住友の事業を経営していました。さらに、一七九一年、息子の万次郎を「病氣」という正式な理由のため、隠居させ、四歳の孫に継がせたことにも、彼の黒幕としての影響・権限を見ることができません。

この事件はさまざまな解釈があると思いますが、私は次のように解釈しました。要するに、「家」的支配といっても、個人の意思の対立が強くなってきます。そして、「家」的所有があつても、個人所有が問題となる時もありました。だから、理想としての共同所有・共同経営と、事実上の経営権・所有権のあり方とのギャップがあつたといえるのではないかと思えます。

さらに、住友の場合、この紛争は経営・所有の分離の直接的な原因となりました。一八世紀の終わり頃から泉屋は番頭・支配人によって経営されるようになってきました。吉左衛門の後に当主となった人は商売への関心をもっていなかったため、経営を支配人と別家に任せました。この傾向は明治期に入ってから、一層強くなり、家長は象徴的な存在になりました。というわけで、日本の商人家は、単独相続と共同経営によって永続を求

めた、といえますが、さまざまな矛盾や問題を引き起こす可能性を常に含んでいました。

最後に

日本とヨーロッパにおける企業の発展は合理的な経営組織への発展とみなすことができると思います。ヨーロッパの場合、国際経済状況に応じて小規模でフレキシブルな会社形態を生み、そのため所有者は経営者でありました。代理人のネットワーク、「加入」という外からの投資もそのシステムの一部でした。会社契約期間が比較的短かったにしても、社内紛争、相続をめぐる問題、社会的可動性も会社の存続を限定したと言えます。しかし、忘れてはいけないのは、会社は商人にとって社会的出世のための手段に過ぎなかった、ということです。

それに対して経営体としての日本の「家」は一種の「タテの法人」として働き、会社に似ている側面もありました。分家・別家を設立することによって「家」の継続や拡大こそが目的と見られたのではないかと思えます。「家」全体の繁栄が利益追求を正当化する大きな要因だったと考えています。つまり、商人階級における「家」制度を一種のビジネス・システムと見ることができます。その基本的な原理は「総有」、「家」メンバ

ーの共同所有・共同経営、だったのです。しかし、日本にもヨーロッパと同じく、相続に関わる紛争、社内対立が多かったと考えられます。経営・所有の分離という株式会社の特徴が日本の「家」に内在していたことはしばしば指摘されていますが、その原因は「家」制度の中の矛盾に探ることができると思います。

参考文献

- Brulez, W. *De Firma Della Faille en de Internationale Handel van de Vlaamse Firma's in de 16e Eeuw*. Verhandelingen van de Koninklijke Vlaamse Academie voor Wetenschappen, Letteren en Schone Kunsten van België, Klasse der Letteren, 35, 1959.
- Voet, Leon. *The Golden Compasses: a History and Evaluation of the Printing and Publishing Activities of the Officina Plantiniana at Antwerp*. Volume I *Christophe Plantin and the Moretus: their Lives and their World*. Amsterdam: Vangendt & co., 1969.
- . *The Golden Compasses: a History and Evaluation of the Printing and Publishing Activities of the Officina Plantiniana at Antwerp*. Volume II *The Management of a Printing and Publishing House in Renaissance and Baroque*. Amsterdam: Vangendt & co., 1972.

石井良助（編）『御仕置例類集』Vol. 1-4（古類集）、名著出版 一九七一

井原西鶴『日本永代蔵』谷脇理史校注・訳『完訳日本の古典五二二』小学館 一九八三

大丸二百五十年史編集委員会（編）『大丸二百五十年史』一九六七

中瀬寿一「幕藩制下における泉屋住友の歴史的研究——住友財閥の源流とその史的考察——」『大阪産業大学学会報』Vol. 11-12、一九七八・一九七九

——「住友の原点」をふりかえる——住友は、どんな改革によって、危機を乗り切り、発展してきたか？『年表』を中心に——『大阪産業大学学会報』Vol. 23、一九九一

三井文庫（編）『三井事業史』本篇・資料篇 一九八〇

安岡重明『財閥経営の歴史的研究——所有と経営の国際比較』岩波書店 一九九八

発表を終えて

近世のヨーロッパと日本という、全く違った環境に置かれた社会の比較研究は不可避免的に対照的研究になることは確かです。しかし、「長者に三代なし」や「売家と唐様で書く三代目」というようなことわざから分かるように、商人にとって苦勞して蓄えた富を三代以降に続けさせるのはヨーロッパのみの問題ではなかったと言えます。つまり、商人の富の蓄積が組織文化、つまり企業（コンパニー・会社）と家族（家）が深く関連していたことも共通的な問題です。日欧両社会の近世的ビジネスにおける共通の傾向とそれぞれに特有な特徴を指摘するのが私の研究の目的でした。現在の日欧両社会の企業文化にも妥当性があるのではないかと考えています。

私は博士課程をも含めて、長い間日文研に滞在することができましたが、いろんな分野の専門家と接する機会が与えられて非常に貴重な体験となりました。指導教官および発表のコメンテーターを勤めて下さった笠谷先生をはじめ、お世話になりました先生方、そして「日文研な人々」全員に心からお礼を申し上げたいと思います。

Bart Goens

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレクサンドロ・バロータ Alessandro VALOTA (ピサ大学助教授) 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11	エンゲルベルト・ヨリッセン Engelbert JORIβEN (日文研客員助教授) 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン Lee A. THOMPSON (大阪大学助手) 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19	フォスコ・マライーニ Fosco MARAINI (日文研客員教授) 「庭園に見る東西文明のちがひ」
⑤	63. 6.14	SONG Whi Chi 宋 藁七 (慶北大学校師範大学副教授) 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9	セップ・リンハルト Sepp LINHART (ウィーン大学教授) 「近世後期日本の遊び一挙を中心に」
⑦	63.10.11	スーザン J. ネイピア Susan J. NAPIER (テキサス大学助教授) 「近代日本小説における女性像—現実と幻想」
⑧	63.12.13	ジェームズ C. ドビンス James C. DOBBINS (オベリン大学助教授) 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡」
⑨	元. 2.14 (1989)	YAN An Sheng 嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11	LIU Jingwen 劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9	スザンヌ・ゲイ Suzanne GAY (オベリン大学助教授) 「中世京都における土倉酒屋—都市社会の自由とその限界—」
⑫	元. 6.13	HSIA Gang 夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) 「インタビュー・ノンフィクションの可能性—猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛かりに—」

⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコワント Ernst LOKOWANDT (東洋大学助教授) 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8	キム・レーホ KIM Rekho (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12	ハルトムート O. ローターモンド Hartmut O. ROTERMUND (フランス国立高等研究院教授) 「江戸末期における疫病神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3	WANG Xiang-rong 汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14	ジェフリー・ブロードベント Jeffrey BROADBENT (ミネソタ大学助教授) 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」
⑱	元.12.12	エリック・セズレ Eric SEIZELET (フランス国立科学研究所助教授) 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ Sumie JONES (インディアナ大学準教授) 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13	カール・ベッカー Carl BECKER (筑波大学哲学思想学系外国人教師) 「往生—日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10	グラント K. グッドマン Grant K. GOODMAN (カンザス大学教授・日文研客員教授) 「忘れられた兵士—戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8	イアン・ヒデオ・リービ Ian Hideo LEVY (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12	リヴィア・モネ Livia MONNET (ミネソタ州立大学助教授) 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10	Lǐ Guodong 李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇—文化伝統からの一考察—」
㉓	2. 9.11	MA Xing-guo 馬 興國 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) 「正月の風俗—中国と日本」
㉔	2.10. 9	ケネス・クラフト Kenneth KRAFT (リーハイ大学助教授) 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ Ahmed M. FATTHY (カイロ大学講師) 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ Karel FIALA (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12	アレクサンドル A. ドーリン Aleksandr A. DOLIN (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) 「ソビエットの日本文学翻訳事情—古典から近代まで—」
30	3. 3. 5	ウィーベ P. カウテルト Wybe P. KUITERT (ワーゲニンゲン大学研究員) 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報—ゲオルグ・マイステルの旅—」
③①	3. 4. 9	ミコワイ・メラノビッチ Mikołaj MELANOWICZ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー Beatrice M. BODART-BAILEY (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) 「三百年前の京都—ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11	サトヤ B. ワルマ Satya B. VERMA (ジャワハルラー・ネール大学教授・日文研客員教授) 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9	ユルゲン・ベルント Jürgen BERNDT (フンボルト大学教授・日文研客員教授) 「ドイツ統合とベルリンにおける森嶋外記念館」
③⑤	3. 9.10	ドナルド M. シーキンス Donald M. SEEKINS (琉球大学助教授) 「忘れられたアジアの片隅—50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8	WANG Xiao Ping 王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12	SHIN Yong-tae 辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) 「日本語の起源 —日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る—」

③⑧	3.12.10 (1991)	HONG YoonSik 洪 潤植 (東国大学校教授) 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ワイシユワナタン Savitri VISHWANATHAN (デリー大学教授・日文研客員教授) 「インドは日本から遠い国か?—第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷—」
40	4. 3.10	ジャン=ジャック・オリガス Jean-Jacques ORIGAS (フランス国立東洋言語文化研究所教授) 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14	リブシエ・ボハフモコヴァ Libuše BOHÁČOVÁ (プラハ国立博物館日本美術元キュレーター・日文研客員教授) 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12	ポール・マッカーシー Paul McCARTHY (駿河台大学教授) 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」
43	4. 6. 9	G. カメロン・ハーストⅢ G. Cameron HURST Ⅲ (ニューヨーク市立大学リーマン広島 校学長・カンザス大学東アジア研究所長) 「兵法から武芸へ—徳川時代における武芸の発達—」
44	4. 7.14	Yoshio SUGIMOTO 杉本 良夫 (ラトロープ大学教授) 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8	WANG Yong 王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研客員助教授) 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13	LEE Young Gu 李 榮九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10	ウィリアム・D・ジョンストン William D. JOHNSTON (ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本疾病史考—『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8	マノジュ・L・シュレストハ Manoj L. SHRESTHA (甲南大学経営学部講師) 「アジアにおける日系企業の戦略転換 —技術移転をめぐる—」

④9	5. 1.12 (1993)	PARK Jung-Wei 朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9	マーティン・コルカット Martin COLLCUTT (プリンストン大学教授・日文研客員教授) 「伝説と歴史の間—北條政子と宗教」
⑤1	5. 3. 9	Yoshiaki SHIMIZU 清水 義明 (プリンストン大学マーカンド荣誉教授) 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 —米国の日本美術コレクションの一例として—」
⑤2	5. 4.13	KIM Choon Mie 金 春美 (高麗大学校教授・日文研来訪研究員) 「日本近代知識人の思想と実践—有島武郎の場合—」
53	5. 5.11	タキエ・スギヤマ・リブラ Takie SUGIYAMA LEBRA (ハワイ大学教授) 「皇太子妃選択の象徴性 —旧身分文化との関連を中心として—」
54	5. 6. 8	H. W. KANG 姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) 「変革と選択：10世紀の日本と朝鮮 —科学制度をめぐる—」
⑤5	5. 7.13	ツベタナ・クリステフ Tzvetana KRISTEVA (ソフィア大学教授・日文研客員教授) 「涙の語り—平安朝文学の特質—」
⑤6	5. 9.14	KIM Yong-Woon 金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12	オロフ G. リディン Olof G. LIDIN (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9	マヤ・ミルシンスキー Maja MILCINSKI (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) 「無常観の東西比較」
59	5.12.14	ウィリー・ヴァンドゥワラ Willy VANDEWALLE (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) 「日本・ベルギー文化交流史—南蛮美術から洋学まで—」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン J. Martin HOLMAN (ミシガン州立大学連合日本センター所長) 「自然と偽作—井上靖文学における『陰謀』—」

61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ Maya GERASIMOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) 「外から見た日本文化と日本文学 —俳句の可能性を中心に—」
62	6. 3. 8	オギュスタン・ベルク Augustin BERQUE (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥③	6. 4.12	リチャード・トランズ Richard TORRANCE (オハイオ州立大学助教授) 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10	シルバーノ D. マヒウオ Sylvano D. MAHIWO (フィリピン大学アジアセンター準教授) 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.14	LIU Jian Hui 劉 建輝 (南開大学副教授・日文研客員助教授) 「『魔都』体験—文学における日本人と上海」
66	6. 7.12	チャールズ J. クイン Charles J. QUINN (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) 「私の日本語発見—王朝文を中心に—」
67	6. 9.13	フランソワ・マセ François MACÉ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) 「幻の行列—秀吉の葬送儀礼—」
⑥⑧	6.11.15	JIA Hui-xuan 賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) 「中日比較食文化論—健康的飲食法の研究—」
69	6.12.20	PENG Fei 彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) 「日本語の表現からみた—異文化摩擦のメカニズム—」
⑦①	7. 1.10 (1995)	ミハイル V. ウスペンスキー Michail V. USPENSKY (エルミターージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) 「根付—ロシア・エルミターージュ美術館のコレクション を中心に—」
⑦①	7. 2.14	YAN Shao Dang 嚴 紹盪 (北京大学教授・日文研客員教授) 「記紀神話における二神創世の形態—東アジア文化とのか かわり—」

72	7. 3.14 (1995)	WANG Jiahua 王 家驊 (南開大学教授・日文研客員教授) 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
73	7. 4.11	アリソン・トキタ Alison TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「日本伝統音楽における語り物の系譜—旋律型を中心に—」
74	7. 5. 9	リュドミーラ・エルマコワ Lioudmila ERMAKOVA (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) 「和歌の起源—神話と歴史—」
75	7. 6. 6	パトリシア・フィスター Patricia FISTER (日文研客員助教授) 「近世日本の女性画家たち」
76	7. 7.25	CHOI Kij-Sung 崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) 「『恨』の日韓比較の一考察」
77	7. 9.26	SU Dechang 蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) 「日中の敬語表現」
78	7.10.17	Li Jun Yang 李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) 「雷神思想の源流と展開—日・中比較文化考—」
79	7.11.28	ウィリアム・サモンデス William SAMONIDES (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
80	7.12.19	タチヤーナ・ソコロワ・デリュシナ Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA (翻訳家・日文研来訪研究員) 「俳句の国際性—西欧の俳句についての一考察—」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク John CLARK (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」
82	8. 2.13	ジェイ・ルービン Jay RUBIN (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12	イザベル・シャリエ Isabelle CHARRIER (神戸大学国際文化学部外国人教師) 「日本近代美術史の成立—近代批評における新語—」

84	8. 4.16 (1996)	リース・モートン Leith MORTON (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
85	8. 5.28	マーク・コウデイ・ポウルトン Mark Cody POULTON (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) 「能における『草木成仏』の意味」
86	8. 6.11	フランシスコ・ハビエル・タバブレロ Francisco Javier TABLERO (慶應義塾大学訪問講師) 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30	シルヴァン・ギニヤール Sylvain GUIGNARD (大阪学院大学助教授) 「筑前琵琶—文化を語る楽器」
88	8. 9.10	ハーバート E. プルチョウ Herbert E. PLUTSCHOW (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) 「怨霊の領域」
89	8.10. 1	WANG Xiu-wen 王 秀文 (東北民族学院助教授・日文研客員助教授) 「シャクシ・女・魂 —日本におけるシャクシにまつわる民間信仰—」
90	8.11.26	WANG Bao Ping 王 宝平 (杭州大学日本文化研究所副所長・日文研客員助教授) 「明治期に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17	CHEN Shen Bao 陳 生保 (上海外国語大学教授・日文研客員教授) 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシエリャコフ Alexander N. MESHCHERYAKOV (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・日文研来訪研究員) 「奈良時代の文化と情報」
93	9. 2.18	KWAK Young-Cheol 郭 永喆 (韓国・漢陽大学文科大学長・日文研客員教授) 「言語から見た日本」
94	9. 3.18	マリア・ロドリゲス・デル・アリサル Maria RODRIGUEZ DEL ALISAL (スペイン・マドリード国立外国語学校助教授・日本学研究所所長) 「弁当と日本文化」

95	9. 4.15 (1997)	ミケーレ F. マルラ Michele F. MARRA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校準教授・日文研客員助教授) 「弱き思惟—解釈学の未来を見ながら」
96	9. 5.13	デニス・ヒロタ Dennis HIROTA (京都浄土真宗翻訳シリーズ主任翻訳家 パークレー仏教研究所準教授) 「日本浄土思想と言葉 —なぜ一遍が和歌を作って、親鸞が作らなかったか」
97	9. 6.10	ヤン・シコラ Jan SYKORA (チェコ・カレル大学助教授・日文研客員助教授) 「近世商人の世界—三井高房『町人考見録』を中心に—」
98	9. 7. 8	キンヤ TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) 「向こう側の文学—近代からの再生—」
99	9. 9. 9	ポーリン・ケント Pauline KENT (龍谷大学助教授) 「『菊と刀』のうら話」
100	9.10.14	セオドア・ウィリアム・グーゼン Theodore William GOOSSEN (ヨーク大学準教授・日文研客員助教授) 「『日本文学』とは何か—21世紀に向かって」
101	9.11.11	KIM Uchang 金 禹昌 (高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授) リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) カール・モスク Carl MOSK (ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授) ヤン・シコラ Jan SYKORA (カレル大学助教授・日文研客員助教授) キンヤ TSURUTA 鶴田 欣也 (ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授) パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
102	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ (龍谷大学助教授) 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 (仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授) 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」

⑩④	10. 2.10 (1998)	GAO Wenhan 高 文漢 (山東大学教授・日文研客員教授) 「中世禅林の異端者——休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン カイザー Stefan KAISER (筑波大学教授) 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Smie A. JONES (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET (モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員) 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩⑧	10. 6. 9	Hiroshi SIMAZAKI 島崎 博 (レスブリッジ大学教授・日文研客員教授) 「化粧の文化地理」
⑩⑨	10. 7.14	Peipei QIU 丘 培培 (バツサー大学助教授・日文研来訪研究員) 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER (チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授) 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪①	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA (カイロ大学講師・日文研客員助教授) 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪②	10.11.10	アリソン・トキタ Alison McQUEEN-TOKITA (モナシユ大学助教授・日文研客員助教授) 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK (シェフィールド大学教授・東京大学客員教授) 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪④	11. 1.12 (1999)	D U Q i n 杜 勤 (華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第2学部副学部長・日文研客員助教授) 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」

115	11. 2. 9 (1999)	シーラ・スミス Sheila SMITH (ボストン大学助教授・日文研客員助教授) 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
116	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON (ハーバード大学教授・日文研客員教授) 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
117	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER (オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授) 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
118	11. 5.11	KIM Ji Kyun 金 知見 (韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授) 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖頌陵詩」
119	11. 6. 8	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
120	11. 7.13	R E E C E Sachiko Taki リース・幸子 滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコン サルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
121	11. 9. 7	SONG Min 宋 敏 (韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授) 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
122	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noel A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
123	11.11.16	ヴラディスラフ・ニカロロヴィッチ・ゴレグリアード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サントペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
124	11.12.14	X. Jie YANG 楊 曉捷 (カルガリー大学準教授・日文研客員助教授) 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」

125	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガ デ レ ヲ Emilia GADELEVA (日文研中核的研究機関研究員) 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
126	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李 応寿 (世宗大学校副教授・日文研客員助教授) 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ マリア・ト レ ェ ン ハ ル ト Anna Maria THRAHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
128	12. 4.11	ペ ッ カ・コ ル ホ ネ ン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」
129	12. 5. 9	KIM Jeong Rye 金 貞禮 (国立全南大学校副教授・日文研客員助教授) 「五・七・五、日本と韓国」
130	12. 6.13	ケ ネ ス L. リ チ ャ ード Kenneth L. RICHARD (県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授) 「出島—長崎—日本—世界 憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン (1867—1944) と倉場富三郎 (1871—1945)」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホ ロ ド ヴ ィ ッ チ Lyudmila HOLODOVICH (ソフィア大学助教授・日文研客員助教授) 「お盆と正教の五旬祭—比較的なアプローチ—」
132	12. 9.12	マ ー ク・メ リ Mark MELI (日文研外来研究員) 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ル ビ ン ジ ャ ー Richard RUBINGER (インディアナ大学教授・日文研客員教授) 「読み書きできなかつたのは誰か—明治の日本」
134	12.11.14	SHIN Yong-jae 辛 容泰 (東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授) 「日本語の『カゲ(光・蔭)』外—日本文化のルーツを探る—」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡 敦達 (同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授) 「中国文人が観た明治日本—旅行記を読む—」

136	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンス Bart GAENS (日文研中核的研究機関研究員) 「長者の山—近世的経営の日欧比較—」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER (ヴァージニア大学教授・日文研客員教授) 「仏教の戒律とは何か？」
138	13. 4.10	Li Zhuo 李 卓 (南開大学教授・日文研客員教授) 「中日姓名の比較について—親族の血縁性と社会性—」
139	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY (フランクフルト大学教授・日文研客員教授) 「西洋における俳句の新しい受容へ」
140	13. 6.12	XU Subin 徐 蘇斌 (日文研外国人研究員) 「中国現代建築の成立基盤—留日建築家・趙冬日と人民大会堂—」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, II (コロンビア大学教授 日文研外国人研究員) 「忠臣蔵再考—四十七士の三百年—」
142	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE (日文研外来研究員) 「聖人伝、高僧伝と社会事業—古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に—」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN (ハワイ大学準教授・日文研客員助教授) 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官 文娜 (日文研外国人研究員) 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ キム ラステイーブン Chigusa KIMURA-STEVEN (ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員) 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
146	14. 1.15 (2002)	SHIN Chan Ho 申 昌浩 (日文研中核的研究機関研究員) 「親日仏教と韓国社会」

147	14. 2.12 (2002)	マシミリアーノ ト マ シ Massimiliano TOMASI (ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員) 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭 惠卿 (世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員) 「日韓言語文化の比較—語る文化と語らぬ文化—」
149	14. 4. 9	マッシュュー フィリップ マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY (ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員) 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法—三条本を中心に—」
150	14. 5.14	LEE Kwang Joon 李 光濬 (東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員) 「禅心理学的生命観」
151	14. 6.11	LU YI 魯 義 (中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員) 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (イタリア カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員) 「建物と権力—明治初期の東京の建築について」
153	14. 9.10	アレクシア ボ ロ Alexia BORO (日文研外国人研究員) 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴—日韓比較—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

<http://www.nichibun.ac.jp/dbase/forum.htm>

発行日 2002年9月30日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075)335-2048
ホームページ：<http://www.nichibun.ac.jp>

© 2002 国際日本文化研究センター

■ 日時

2001年2月6日（火）

午後2時～4時

■ 会場

国際交流基金 京都支部

第三回 長春の山

へルト・カレンス

国際日本文化研究センター